

センタージャーナル

■ 発行人 / 荒山 淳
■ 発行所 / 真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



比叡山延暦寺 根本中堂で営まれた恵心（源信）僧都一千年御遠忌
研究生の現地研修中（4面・5面参照）、本願寺派による法要が厳修されていた。
※大谷派による法要は6月22日に勤められた。

(写真の無断転用はご遠慮ください。)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 聖典研修 第15・16回
『仏説阿弥陀経』
—その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・ 研究生報告
親鸞聖人の足跡を訪ねて
(比叡山での修行体験) ④・⑤
- ・ 大谷派の近現代史
「禅と戦争」 ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

大悲無倦—人情を包む法情—

延暦寺は大乗菩薩道の根本道場の願いのもと最澄によって開かれたという。源信僧都・法然上人・宗祖親鸞聖人もこの地で御修行され、自力聖道門から他力浄土門に廻入していく縁となった場である。恵心（源信）僧都一千年御遠忌法要に、教化センター研究生が参拝させていただいた。

源信、天曆十（九五六）年十五歳、『称讃浄土経』を講じ、昌子内親王法華八講の講師に選出され、賛辞賜品が与えられた。嬉しさのあまり郷里にいる母に賜品を送ったという。すると年老いた母は、

後の世を 渡す橋とぞ 思いしに
世渡る僧と なるぞ悲しき

「諫言の和歌」

の歌を添え、悲歎を込めて返事をしたという。「貴方を名譽な法師にさせるために出家させたのではない、姫の後世を救わんがためである」と。

仏陀が菩提樹の下で内観思惟したとき覺りを邪魔しようと「魔の十軍」が襲い来った。後三の魔が、虚栄と剛情（身の丈以上に自分を大きく見せたい）、

名利（名声と利潤追求）、自讃毀他（自分を偉く見せるため他を叩くこと）であつたという。後に源信僧都は、

大象の窓を出るに、遂に一の尾の為に碍げらる。行人の家を出づるに、遂に名利の為に縛せらるると。則ち知る、出離の最後の怨は、名利より大なる者は莫きことを也。

『往生要集』（聖至一・八八八頁）

と、出家し教えの如く修行すれども、名利に縛られ、出離生死かなわず流転していく姿を『往生要集』に喩でもって教示しておられる。

浄土を顕すことは、同時に穢土をも顕す、この二つの世界のはたらきこそ、私の人生に真実を与えるのであろう。人情をもって喜んでもらおうとした行為が、かえって母に「悲しき」大悲を興させ、法の温もり大悲無倦が法情となつて、人情を包んだのである。宗祖は、この真実を生きた人として生きる根拠と力を自覚した源信僧都を七祖として仰がれていかれたのではなからうか。千年経つても真実は色褪せることなく常に我が身を照らし出す。

（主幹 荒山 淳）

聖典研修

『仏説阿弥陀経』―その教義と真宗の儀式―

第十五回 二〇一六年三月十七日（木）

「七」に表わされる教え

講師 廣瀬 惺氏（同朋大学特任教授）



憶念する言葉

宝樹莊嚴を見ますと、
極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。

〔聖典〕一二六頁

とありますように、浄土の莊嚴が説かれていく際に、「七」という数字で表されている事柄があります。これは「七菩提分」を意味します。七菩提分の「分」とは因ということであり、仏道を求め歩む上で大切な七つの事柄です。その中、今日は特に大事な三つのものにだけ触れさせていただきたいと思えます。

一番目に取り上げられているのが「念菩提分」です。「念」とは憶念、生活の中で保つこととしましょう。いろいろな問題が起こってきますと、私たちは自分で解決しようと思いますが、自分の考え以上のことは出てきません。そのことを超えて本願に立ち返らせる言葉を憶念し続ける、そういったことを抜きにして「信」が明らかになることはないでしょう。親鸞聖人のご生涯にたずねますと、法

ていくのではないのでしょうか。そういう意味で「摂法菩提分」のところにいたたかれますのは「有縁の法」です。

以前にもお話ししましたように、「有縁」とは常にそれに学ばずにおられないということとです。ですから「摂法菩提分」とは、このこと抜きには仏道が成り立たない、日々の生活の中で絶えずいたたかずにはおられない教えを持つことだと言えます。

仏道を歩む上で、何一つまともにできない私たちに對し、親鸞聖人が勧めてくださっているのがこの二つの「因」（実践）です。「念菩提分」とは生活の中で憶念する言葉を持つこととあり、「摂法菩提分」とは日々いただいたいく教えを持つということとです。

そしてこれらが続けるといことが、三番目の「精進菩提分」でしょう。このことについては、曾我先生の「急がず、休まず」という言葉が思い出されます。たとえ五分でも十分でも続けていくことにより、それが生活の要になっていくということとです。私たちの上に「精進」が成就された形としては「習慣化」というものが挙げられます。

教えをいただくことが生活の中で習慣となっていく、それが蓮如上人の勤行の精神ではないかと思えます。精進の形が、お朝事やお夕事という姿に表れていると思うのです。その勤行が上人の真宗再興の一番の土台にあるものだと思います。そこに、私たちにおける、有縁の法をいただき続けていく精進の形が見られると言えます。

「聞思して遅慮することなかれ」

そうしますと、「七菩提分」で表されている「因」とは、聞法生活を成り立たせるものと言えます。聞法生活というのは、ただ本を読んでいけばいいというものではありません。聞法生活を成り立たせる七つの事柄、その中で特に最初の三つが重要になってくると思うのです。そうでなければ、話を聞くということも、法（本願）を聞き法に生きるということにはなっていないかでしょう。

『教行信証』「総序」をご覧ください。親鸞聖人は、

撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。

〔聖典〕一五〇頁

と教えてくださっています。「念菩提分」の憶念し続ける言葉を「撰取不捨の真言」として、そして「摂法菩提分」の有縁の法を「超世希有の正法」として、表して下さっています。それらをいただき続けていく生活（宗教生活）を、私たちに示して下さっているのです。

いろいろなものの考え方や出来事の中で、自分の人生をかけたがえのないものとして成就していくのは容易なことではありません。人生を成就せしめていく道として、親鸞聖人が「総序」で教えて下さっている言葉に合わせ、「七菩提分」をいただくことであります。

「急がず、休まず」

二番目が「摂法菩提分」です。これは道を尋ねていく中で、摂ばしめられていく教えのこととです。真実の「法を摂ぶ」ということですが、感覚としてはこちらが摂ぶというよりも向こうからやってきてくださると言えます。私たちが知らずれば、道を求めていく歩みにおいて、確かな教えとして信順できる教えに出あわれ

第十六回 二〇一六年六月十六日 (木)

欄楯・羅網・行樹

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



「欄楯」の中に

宝樹莊嚴には、極楽の隅々にまで行き渡っていると表現されている莊嚴があります。つまり、それらの莊嚴において極楽が、また極楽の聞法生活があるという大切なものだと言えます。このことについてお話ししたいと思います。

まずは「七重の欄楯」ですが、「欄」とは縦の柵、「楯」とは横の柵です。この欄楯が極楽全体を護っているとおっしゃる方もおられますが、私は一本一本の樹を護っている状態だと受け取っています。そうしますと、これが何を表しているのかということになります。一人一人の聞法生活を護ってくださいというものといただいております。その、聞法生活を護ってくださいという欄楯として、「信巻」で教えてくださっている「現生十種の益」の四番目、「諸仏護念の益」(『聖典』二四〇(二四一頁)を思うのです。

を念じつつ歩んでいく道が聞法生活でしょう。『教行信証』「後序」をご覧ください。

何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。

(『聖典』四〇一頁)

親鸞聖人は『安楽集』のお言葉を引いておられますが、聖人は後なる我らを念じながら命を終えていかれた、あるいは今も現に念じておられるということではないでしょうか。

注意を払いたいのは、「後に生まれん者」の「者」の横に「ひと」と打たれていることです。親鸞聖人は尊敬して言われる時に「者」の横に「ひと」と打たれるのです。こういったことにより、「欄楯」で表されているものとは、諸仏に護念せられながら、護念の中に歩まれている道だと言えましょう。

「羅網」の世界

次に「七重の羅網」です。「羅網」というのは上にかけられている網です。宝の網のようなものが、樹を讃嘆するものと

してかけられているということです。私にはこれを、「現生十種の益」の五番目、「諸仏称讚の益」(『聖典』二四一頁)を表すものといたいただいております。

聞法生活は、先にお念仏に生きてくださっている方々から、褒められ称えらるる生活だということです。自身が褒め称えられているということについて、なかなか実感が伴いません。しかし、普段気には留めておられないかもしれませんが、私たちが親鸞聖人の教えを学んでいることに安堵しておられる、褒め称えてくださっている方々がいらっしゃるのではないのでしょうか。そういう世界が「羅網」に表されている「諸仏称讚の益」だと受け取っています。

「行樹」のすがた

そして「七重の行樹」です。「行樹」とは並木のことです。並木というのは一本一本ですが、一本一本だからといって孤立しているわけではない。そういった姿から、「行樹」には僧伽の相が表されていると思うのです。

どういふことかと言いますと、仏道は一人一人において求められ、出あわられていくものでしょう。たとえ共に学んだとしても、私なら私において救いを明らかにしていかねばならない。曾我先生は「仏法は一人ひとりにおける絶対責任においてあるものだ」という言い方をさ

れます。仏道とはそういう厳しさを持っているということなのです。

それでは孤立しているのかといえはそういうわけではありません。共に学ぶ中で歩みをお互いに支え合い、励まし合うということがあります。また、他の人が明らかにされたものは、そのままでは私の答えになりませんが、他の方が明らかになさってくださいたものを通して、自らを明らかにしていくということがあります。こういった僧伽の相を、「行樹」という並木の姿にいただかれます。

宗教の真実は、救いを求める心に開かれてくるものです。人に対して説こうとする心に開かれてくることはありません。ですから人に教えを説くために学ぶのではなく、私において私の救いを求めていくということでしょう。そのことの歩みの中で、ご縁の方々と歩みを共にしていくということになっていくのではないのでしょうか。

ですから、私は真宗の歩みを次のように受け取っています。私に教えを説いてくださる方は私よりもっと先を歩んでおられる。説く人も歩んでおられるという事です。説く人と聞く人、という固定された構造ではありません。求める心に法が開かれてくるわけですから、先に先んじて歩んでおられる方のいたただかれたところが、私にとって大きな教えとなつていくということではないのでしょうか。

研究生報告

親鸞聖人の足跡を訪ねて
求道者 仏法を求め歩むとは？
 (比叡山での修行体験)

五月三十一日から六月一日、教化センター研究生は「求道者 仏法を求め歩むとは？」のテーマのもと比叡山を訪ね、修行の一端を体験できる延暦寺「居士林」での研修を行った。

親鸞聖人は九歳で得度され、二十年間にわたって比叡山で修行されたと伝えられている。しかし、修行中の聖人の足跡については歴史的史料が乏しく、詳しいことは不明のまま。そこで、このたびの研修では、真剣に仏道を求め比叡山で修行に励んでおられる方々との出会いを通じて、修行中の聖人を想像しつつ、私たち自身の歩みを確認する機会となることを願って行った。研究生が感じた「比叡山」について掲載します。

「真宗僧侶としての私」と比叡山

期待と不安を抱きつつ研修に臨んだが、いざ修行体験が始まると自分自身と向き合うことができ、とても有意義な時間に感じた。また、辛そうな修行体験を淡々



宮本祖豊 師 (居士林所長)
 ・昭和35年、北海道に生まれる
 ・平成21年、比叡山で最も厳しい修行の一つである十二年籠山行満行を果たす
 ・現在は延暦寺龍院住職、比叡山延暦寺居士林所長を務める
 ・著書に『覚悟の力』(致知出版)

自身の欲望と向き合って

三十分の座禅、一時間の常行三昧。決して難しいことではない。それでも私にはとても長く感じられ、集中力は持続せず、常によそ事を考えていた。心を無に

と語る宮本先生からは「純粹に仏道を求める」姿勢が感じられ感動した。郷に入っては郷に従えという気持ちで、比叡山の修行に順応しようと心掛けたが、「真宗僧侶としての私」が出現。大いに反省している。帰り際、そのような私に笑顔で声をかけてくださった宮本先生の姿に、比叡山の懐の深さを感じた。延暦寺の方々と、いつか同朋会館のような座談会ができたら良いなと思う。
 第十期研究生 玉腰 暁広

人生で最も気を使った食事

「早く終われ」などの欲望が強くなる。あらゆるために自身の欲深さを感じるとともに日常のほとんどが欲望で成り立っていることに気づかされ怖くなった。僅かな時間の修行体験ではあったが、日常では気づけない、見ようとならない自分の姿が少し見えた気がした。
 第十期研究生 菱川 俊

比叡山での修行体験で学んだことは、生活の全てが修行であるということ。そのことを一番感じたのは食事の作法である。米粒一粒、汁一滴も残すことなく音を立てることなく速やかに食事を頂く。これまでの人生で最も気を使った食事を頂いた。

また今回の研修で体験した座禅と常行三昧では、集中力が持続せず、自分の心の弱さ・甘さを感じられた。これらのことを自覚意識しながら、日々の生活を見つめ直したい。
 第十一期研究生 鍋野 了悟

百聞は一見にしかず

比叡山では食事も修行だった。食前に偈文を唱え、一切の私語が禁止される中、短い時間で一切の音を立てずに、茶碗一杯のお茶で、米粒ひとつ、汁一滴残さず洗鉢しながら食事を頂く。「これが古くから日本に伝わる食事の作法」と聞いて驚いた。さらに驚いたのは、「仏にありがとう」だけに過酷な修行をしている人が現



常行堂(写真左)で60分だけの常行三昧体験を終えて居士林へ。移動中も私語は厳禁だった。

「雑行を棄てて本願に帰す」に思いをめぐらせて…

比叡山は、現代においてもなおお仏道に心向ける空気が流れる出家修行の場であることに、まず驚いた。さらに、修行をされている方から聞いた「修行は強制されるものではない。だから山を下りる

代において、実在していたことだ。「仏にあう」と聞いて、オカルト的な神秘体験か思い浮かばなかった私だが、真剣に道を求めて修行をしている人の姿に触れ、「道を求める」とは「どうということなのか考えさせられた。まさに百聞は一見にしかず。身を運んで実際に感ずることの大切さを感じた二日間だった。
 第十二期研究生 加藤 博証

の現代史
谷近

平和展スタッフ学習会（講義抄録）

「禅と戦争」

ブライアン・A・ヴィクトリア氏
（オックスフォード大学付属仏教研究所研究員）



三月二十五日（金）、『禅と戦争―禅仏教の戦争協力』（えにし書房）の著者であるブライアン・A・ヴィクトリア氏を囲んで平和展スタッフ学習会を開催した。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要期間中に開催した「第28回平和展―けされた親鸞聖人―」の事前学習会と位置付け、ブライアン氏が「禅と戦争」をテーマに講義し、宗教の戦争責任について学んだ。日本語訳者のエイミー・L・ツジモトさん同席のもと、講義は第一部「問題提起」と、第二部「解決について」の二部構成で行われた。抄録を掲載し、平和学習に資したい。

はじめに

『禅と戦争』（新装版）出版について

（※訳者エイミーさんより）

この本は一九九九年に日本語で初めて翻訳をし、その後、関係者に大変な軋轢といえますか、わかりやすく言うとなんか嫌がらせの手紙などがございました。そのほとんどが一般の人ではなく、僧侶や仏教関係者からであったのです。

それから十数年が経ち、この度、戦後七十年というひとつの節目に当たり、仏教者たちがいかに戦争に加担してきたかということに改めて認識してもらいたいということ、再出版が叶いました。

第一部 問題提起

僧侶が向き合うべき視点

はじめまして。私も良潤りょうじゆんという僧侶がご紹介します。今日のテーマは「禅と戦争」ですが、「仏教と戦争」の問題であり、「宗教と戦争」の問題でもあります。真宗でも禅宗でも仏教でもなく、いわゆる「宗教」と「暴力（戦争）」が、なぜ結び付けられているのかについてです。

実は私は、この日が来るのを十五年間待っていました。この本が出てから、かなり反響を呼んだ。だけど私は、禅宗である何が何宗であろうが、このような学習会に呼ばれて「ともに考えましょう」ということが、一度たりとも無かった。何故でしょうか？

それは、自己に不利益な事実を認める姿勢、度量、責任感の欠如だと思えます。自分の祖先や師匠がそういうことをやっていたと思いたくもないし、知りたくもない

し、聞きたくもない。だから耳を塞ぐのです。

日本は戦争できる国へと

去年、日本は集団的自衛権の行使容認により、再び戦争のできる国になってしまった。問題は、これから日本の仏教徒・僧侶たちがどうするのかについてです。ここに、アメリカの社会学者ピーター・L・バーガー（一九二九―）の指摘があります。

ひとつの国が自国民を殺人者にする時や、危険な状況に陥る時、宗教的正当性の裏付けが重要な役割を果たす。故に昔から今日に至るまで、国の命令で敵を殺める前に宗教の加護などが求められるのだ。戦争に出掛ける時、戦場で死ぬ時、祈りや戦死者の冥福など様々な宗教儀式が行われる。

要するに、戦争というのは人が死ぬわけです。そこが宗教家の領域ですね。その「死」を正当化し、意味をつけなければならぬ。それを「お国のため」「社会のため」と正当化するのが宗教家の役割。ゆえに必ず宗教と戦争は結び付けられている。

そして、フランスの神学者ブレイズ・パスカル（一六二三―一六六二）は、こう言いました。

宗教的信念があった時こそ、人間は悪を徹底的に、かつ喜んでする。

いわゆる殺人をするということは正義だと。その正義感を植え付けるのが、残念ながら宗教なのです。

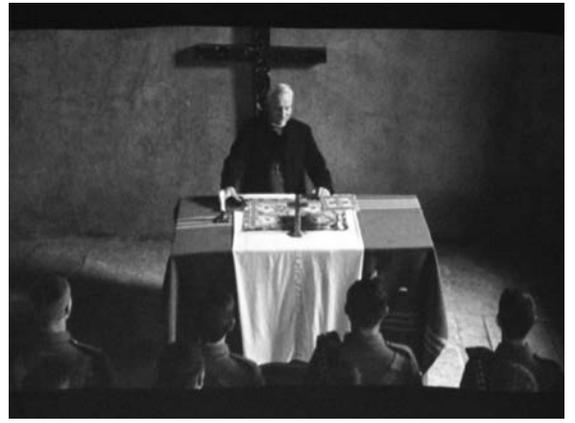
クリスマスの停戦

第一次世界大戦はキリスト教徒同士で戦っていたのです。戦争は一九一四年に始まり、クリスマスを戦場で迎えました。クリスマスイヴになり、ドイツ側で兵士が讃美歌を歌い始めます。一方でイギリスとフランスの兵隊たちも讃美歌を歌う。誰かがクリスマスツリーを飾る。そこで「じゃあ、今晚だけ停戦しようじゃないか」と。それで、戦闘状態の兵士が洞窟から出てきて、殺し合っている場で会って、礼拝するわけです。次の日のクリスマスデーも「戦争するのは嫌だ」とサッカーの試合をやりましたのです。

それでどうなったのかというと停戦を知った司令官が怒り出すわけです。停戦を聞いたボスの司教が怒って、イギリスから戦場に向き、従軍布教使と対決するわけです。そのことを描いた映画『Joyeux Noel（戦場のアリア）』の中に「説教」があります。

神の刀は、あなた方の手にある。あなた方は文明そのものの守り手である。これは「善の力」対「悪の力」の戦いである。故に、この戦争は誠に聖戦である。世界の自由を救うための聖戦である。ドイツ人は神の子どもではない。彼らは野蛮な行動を繰り返す。故に、神の加護の下で全てのドイツ人を殺さなければならぬ。徹底的に。

いわゆる敵というのは全部悪だということです。その結果、第一次世界大戦では三七〇〇万人が死んだのです。



映画『Joyeux Noel (戦場のアリア)』の一場面。十字架を背に、司教が兵士たちに「説教」する。

日本仏教の聖戦論

では、日本仏教の場合はどうだったか。聖戦論者としてはあまり知られていないと思いますが、真宗大谷派の井上円了(一八五八―一九一九)は当時こう言っていました。

露國は独り我國敵のみならず、仏敵なり：今日仏教の依然として我那(我が国)に存するは、聖徳太子以来歴代の皇室の保護、皇族の帰依に基かざるは莫し。この点より視るも仏者は仏恩の為、皇恩の為に死を決して戦うは当然の事なり。

それから私の恩師の樽林皓堂(一八九三―一九八八)は当時こう言っていました。

皇軍の進む所には仁愛のみあって、支那兵の如き残虐無道の行為はあり得ない。これこそ実に仏教が永い間かけて育成してきた偉大なる成果と云って良いであろう。言い換えれば

仏教精神に鍛えられた皇軍将士には残虐性そのものが存在しないのである。

他にも、原田祖学(一八七―一九六一)などが、同じように聖戦を肯定する発言をしています。

【第二部】解決について

軸の時代

こうした問題をどう考えれば良いのでしょうか。為政者たちは、国に対する忠誠を強く要求します。普遍的な真理を持つている宗教と、自分の属している国や政府。その要求は違ってくるわけですね。それがぶつかるわけです。

ドイツの哲学者カール・ヤスパース(一八八三―一九六九)が唱えた「軸の時代」という言葉があります。これは、紀元前八〇〇年頃から紀元前二〇〇年にかけておこった世界的、文明的な一大エポックのことです。中国では諸子百家が活躍し、インドではウパニシャッド哲学や仏教、ジャイナ教が成立し、イランではザラスシュトラがゾロアスター教の世界観を説き、パレスチナではイザヤ、エレミヤなどの預言者があらわれ、ギリシヤでは三大哲学者のソクラテス、プラトン、アリストテレスらが輩出して、後世の諸哲学、諸宗教の源流となった時代です。「軸の時代」において新しく誕生した宗教は、ただ単に自分の部族や民族や人種や国家の幸せではなく、すべての人間のためと考えた。なぜならば、その教理は

「普遍的真理」であると信じたから。同時に、部族などの集団を守るための宗教ではなく、信者一人ひとりの「救い」や「解脱」が中心課題となったのです。

普遍宗教と部族宗教

日本は部族宗教の神道と普遍的な仏教の両方を持っているわけです。ただし、神仏習合ということ、部族宗教と普遍的宗教を一つにしてしまった。明治の神仏分離によって分かれたが、これは非常に良かったと思います。なぜならば、普遍的な仏教は部族宗教になつてはならない、というのが私の主張だからです。

仏教は普遍的な真理を持っていますが、神道にはそれがありません。いわゆる国家主義的な時代においては仏教を受け入れるはずもない。そして、仏教を弾圧してしまつたがゆえに、仏教者たちは国家に進んでしまった。普遍的な仏教を部族的な仏教に変えてしまったというのが私の解釈です。

真理と思ひ込んでしまふ

「軸の時代」を経ても問題は残っていた。すなわち集団全体を守ろうとした部族宗教が完全になくなつたわけではなく、一時的に隠されただけなのです。集団全体を最優先する部族宗教がいつでも再び登場する用意がある。だからこそ大きな悲劇が潜んでいる。すなわち、部族宗教意識が登場しながらも、一人ひとりの信者は「自分は相変わらず普遍的真理に忠誠である」と信じているのです。

ゆえに戦争になると、自分たちの普遍

的な真理が、逆に国家の砦になつてしまつた。自分たちは国家に御用化されたとは思わないで、相変わらず自分たちを「普遍的な真理を説いている」と思ひ込んでしまつていたのでした。

基本的矛盾の把握

ではどうすれば良いのか。第一に、原因の真の性格ならびに由来を把握することです。自分の集団以外に関心を持たない部族宗教と、普遍的真理を持つ世界諸宗教との基本的矛盾の把握です。

次に、自分の宗教が持っている普遍的真理に忠誠を保つこと。国家から何と言われようとも、弾圧されようとも。少なくとも、欺瞞的態度をやめて、戦時中の部族的宗教化した宗教を正当化しようとしないことです。

未来に向かつて

我々仏教徒の姿は、仏法が持っている普遍性を生かすことができるかどうかにかかっています。すなわち「衆生無辺誓願度」という菩薩のひとつの誓いを実行できるのか。実行できるならば、仏教は世界の諸宗教の中で初めて誕生する真の普遍的宗教になる。真の意味での平和的宗教になり、仏法にかなつた宗教になる。仏教は普遍的な真理を持っています。それを曲げることもなく、犠牲にすることもなく、捨てることもなく、実行することなく、特に若い僧侶たちに対して私は希望しています。

研究生(有志)

御坊夏まつりに「浪江太っちょ焼きそば」を出店

教化センター研究生が有志を募り、御坊夏まつりに飲食ブース「浪江太っちょ焼きそば」を出店した。昨年は出店を見送っていたため、研究生一同今年にける思いが強く、私もとても楽しみにしていた。ところが、夏まつり三日前から突然の体調不良。できる作業に限られてしまった。

鉄板の熱気と飛びはねるソースを浴びる仲間たちを背後から眺めつつ、感じたことがある。調理と裏方の作業、両方得意な人が居たとしても、その人一人で出店することはできない。多岐にわたる作業を同時にこなすことはできないからだ。調理をする人、下ごしらえをする人、接客をする人、雰囲気盛り上げる人など、御遠忌の演劇に続いて、研究生一人ひとりの力の結集を見た。ブースは大盛況のうちに終わり、私も少しは役に立てたのだろうか。

来店された方々の「福島の焼きそばを食べることができてうれしい」、「とてもおいしかった」という声を聞くことができ、来年も出店したいという気持ちが強くなった。

(第10期研究生 たまこし あきひろ
玉腰 暁広)



福島に想いを寄せたい。そんな研究生たちの想いが、虹となって夜空を覆った。

INFORMATION

教化センター日報

■2016年6月～8月

- 6月1日 研究生・現地研修「比叡山」(5月31日～)
7日 研究生・学習会「現地研修 反省会」
16日 教化研修「聖典研修⑩」(廣瀬惺氏)
17日 研究業務「第27回平和展」反省会
24日 教化センター運営会議
28日 研究生・学習会「次年度カリキュラム」会議
研究業務「自死遺族わかちあいの会」打合せ

- 7月8日 研究業務「平和展」学習会
15日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習」
21日 研究業務「平和展」学習会
22日 研究生「第10期生 修了式」
8月9日 研究業務「平和展」学習会
11～14日 「2016 あいち・平和のための戦争展」出展
20～21日 名古屋別院「御坊夏まつり」出店(研究生有志)
26日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習」
研究業務「自死遺族わかちあいの会」打合せ
29日 研究業務「平和展」学習会

『教化センター研究報告』第11集を発行しました

第1章 研究 研究員報告

- 1 大谷派の近現代史
大谷派と戦死 - 名古屋教区教化センター所蔵「天野家史料」を手がかりにして - 新野 和暢
2 尾張の真宗史
尾張の真宗法宝物史料調査報告 小島 智
3 現代社会と真宗教化
親鸞から問われるボランティア - 生活と仏道の行の乖離を通して - 大河内真慈

第2章 研修 研究生報告、

- 1 演劇
「親鸞・恵信尼 結婚披露宴 - 七五〇年の時を超えて -」
を終えて 飯田真宏・加藤浄恵
* 資料 - 「同 演劇台本」
2 「研究生レポート」(第8期生2名・第9期生4名)

以上の内容を掲載しています。
ご希望の方は教化センターにお問い合わせください。



《雑感》

毎朝、眠い目を擦りながら午前6時にお寺の梵鐘を突き、1時間ぐらい田舎道をウォーキングしてからお内仏にお参りし、朝食をいただく。これが私の朝のライフスタイルだ。

ただ最近、歳のせいかな?夏バテかな?夜中に目が覚めて眠れない。ライフスタイルが崩れつつある。朝起きるのが本当にしんどい。「もう少し寝かせて」「今日は突くの止めようかな」と思いながら梵鐘を突く。

そんな私に、ご門徒さんは「毎日梵鐘ごくろうさん」。思わず私は照れ笑い。鐘の音を聞いて朝が始まるのは、ご門徒さんにとってのライフスタイルでもあったのだ。

坊守いわく、戦後68年にわたり毎日お寺から鐘の音を響かせていたという。よし、明日も眠い目を擦りながら突きつけよう。

(H²)

教化センターの人事がありました

〈退職〉

事務職員 曾場 浩代 (2016年6月30日付)

〈異動〉

事務職員 佐藤 亮賢 (2016年7月1日付) 別院総務部へ

〈新任〉

事務職員 林 博行 (2016年7月1日付)

非常勤嘱託 田中 真理 (2016年9月1日付)

◆Blu-ray再生機 貸出開始◆



DVDに加え、Blu-rayにも対応。
配線も簡単になりました。教化活動にご活用ください。

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

イラストカッター集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。